★社会運動史資料の宝庫！ 復刻成る……

★復刻版概要――B5判・B4判／上製本／全3回配本

★別冊――解説（田中真人）・総目次・索引

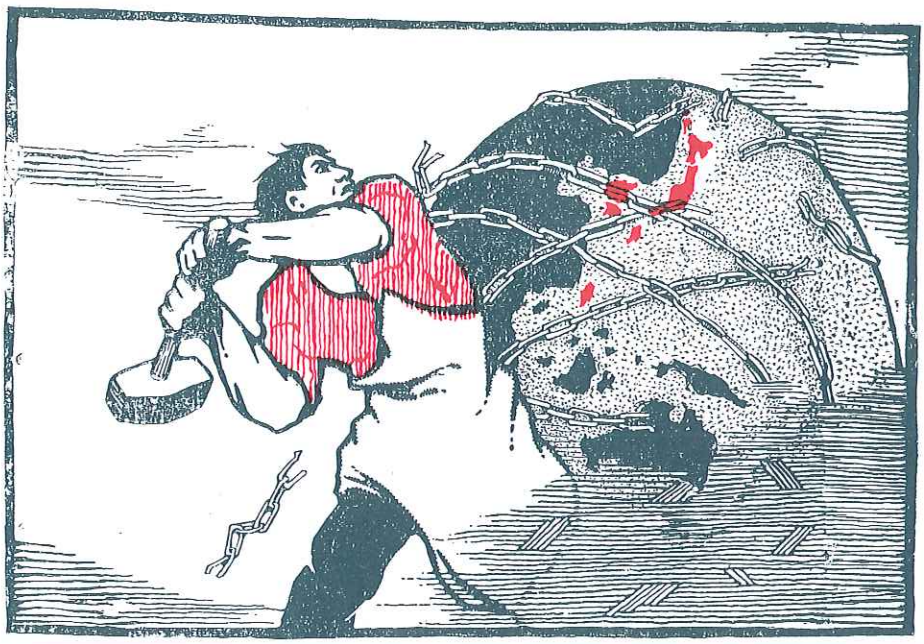
★本体揃価格――全12巻・別冊1揃価 240,000円

★原本――大正12年2月→昭和9年11月

全12巻
別冊1

★推薦――小松隆二・斎藤 勇・渡辺悦次・渡部 徹

本誌は、第一次大戦後の労働運動の高揚期に、北原龍雄・福田狂二等により創刊され、両者の思想的立場を反映し、執筆者は多彩を極める。一時、「共産党の合法的機関誌としての役割」を担うが、福田の右傾化により、後半は時代に流されていく。



★復刻版『進め』推薦の言葉

「生存権擁護」の視点に立った『進め』

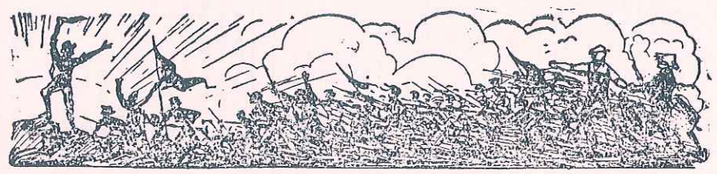
小松隆二・慶応大学教授

『進め』の評価はこれまで、必ずしも高いものではなかった。それは、同誌が特定の領域や視点にこだわらぬ雑多な内容をもっていたこと、あるいは発行人の福田狂二が右翼に転向することがあずかっていたといってよいであろう。しかし、近年、その転向自体、興味や研究の対象になっており、福田の思想的遍歴も、また多面的な『進め』の在り方も、先入観なしに改めて検討しなおす必要があると思われる。

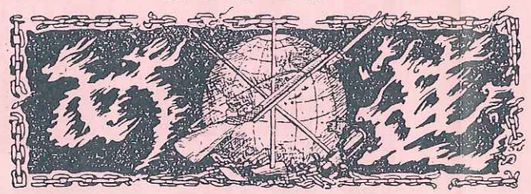
もともと、大正年間に創刊された社会運動機関誌で、労働組合関係のものを除けば、『進め』ほど長く継続された例は珍しい。いうなれば大正デモクラシーの高揚とともに生成、発展し、やがてその終焉を確認するように思想的位相も大きく変質させつつ、その後も長く生きのびるのである。それだけに、きわめて貴重で有益であり、また変移があって当然でもあるのだが、福田の場合、左翼、中間派、右翼とすべてに足跡をとどめる軌跡を示したことがことさら興味を引く。

もちろん、『進め』は長く継続されたことにのみ意義を有しているわけではない。意外にも、地味ながら基底的な意味をもつ生活視点をしばしば覗かせ、とりわけ昭和初期の金融恐慌下には、一度ならず〈生存権〉の擁護を訴える論稿を載せていることも注目される。それに、前田河広一郎、小川未明、小牧近江、堀江帰一、櫛田民蔵、鈴木文治、徳田球一など思いがけない人物が登場することも、留意されてよい。

この度、容易に手にできなかった『進め』が復刻されることで、以上のことどもをきちんと検証できるようになったことを心から喜びたい。



〈五十音順〉



『進め』の復刻を喜ぶ

斎藤　勇・愛知大学教授

もう一〇年以上、ものによっては二〇年も前の話になる。拙著『日本共産主義青年運動史』や東海地方社会運動史(現在進行中)の仕事のために、東大新人会や早大建設者同盟の機関誌類、初期共産党の機関誌類『赤旗』『前衛』『階級戦』『農民運動』、さらには雑誌『解放』『我等』などをさがして、大原社研や京大人文科研をあさり、読んでいたころ、そこで欠号の多い『進め』を発見したのは。

私の書棚のスクラップ・ブックには、それらから抜粋した手書きのノートの切片や、中央労働学院のくもの巣の張った書庫で自分で撮影拡大したマイクロ・フィルムのプリント、のちになると例の「デンリコ」で複写した大量の史料が貼ってある。『進め』はそのなかの三冊におさまっている。史料の収集は、手書きからゼロックスへと隔世の進歩をとげ、『社会運動通信』をふくめて多くの稀少史料が復刻された。ここにいままた『進め』が加わったことは、たいへんうれしいことだ。若い研究者が、とくに地方にいる研究者が、かつて私どもが東奔西走し、かつ欠号に泣きながら探索した手間をはぶいて研究を進めることができるのだから。

「戦闘雑誌」、のちには「無産階級戦闘雑誌」と銘打った『進め』は、発刊以来ひんぴんと発禁にあっている。一九三〇年前後でも、二九年の七、八、一〇月が発禁、九、一一月休刊、三〇年の二、三、四月が発禁というぐあいであり、五、六月合併号(全国労働組合同盟批判号)では、「維持会員を募る、発禁の嵐の前に協力せよ」と、毎月五〇銭以上の維持費を訴えている。その思想的立場はあの激動期を反映して、幾度か変っているが、当代の理論家・運動家・作家たちを擁してはなばなしい。私もぜひ通して精読したいと思っている。

また運動史資料が豊富に

渡辺悦次・社会運動史研究家

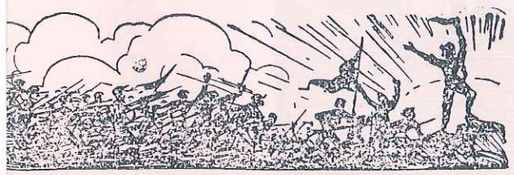
『進め』が復刻刊行され、戦前の社会運動資料にまた厚みができ、大変喜ばしいことである。

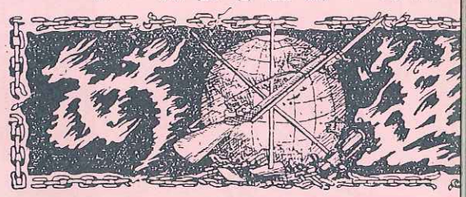
『進め』は、第一次世界大戦後の社会運動の高揚のなかで確立していった労働組合組織が大衆的基盤を確立した一九二三(大正十二)年二月に創刊された。初代編集長は北原龍雄であり、北原と社主の福田狂二の人脈が執筆者としてフルに動員された。

『進め』の第一の資料的価値はこの人脈による執筆者の豊富さである。明治期社会主義運動の時代から活躍した堺利彦、岡千代彦、荒畑寒村、山川均ら、それと山川の門下生と違って十分な意見の開陳の場を提供している。すなわち、運動の具体的実情、内実がよくわかり、その点でも資料的価値を高いものにしている。

また執筆者陣の多様性だけでなく、編集者が時事の課題についてのアンケートを集めている。すなわち、創刊直後の社会運動にとって最大の課題であった普通選挙と無産政党の問題をはじめ、その後の、時々の運動課題についてひろくアンケートにより意見を載せている。それと『進め』地方支局設置による地方運動通信の掲載にも努力している。

それらが社会運動史研究にとって必見の資料となってい





また運動史資料が豊富に

渡辺悦次・社会運動史研究家

『進め』が復刻刊行され、戦前の社会運動資料にまた厚みができ、大変喜ばしいことである。

『進め』は、第一次世界大戦後の社会運動の高揚のなかで確立していった労働組合組織が大衆的基盤を確立した一九二三（大正十二）年二月に創刊された。初代編集長は北原龍雄であり、北原と社主の福田狂二の人脈が執筆者としてフルに動員された。

『進め』の第一の資料的価値はこの人脈による執筆者の豊富さである。明治期社会主義運動の時代から活躍した堺利彦、岡千代彦、荒畑寒村、山川均ら、それと山川の門下生の西雅雄、高橋貞樹ら、また新人会から友愛会、総同盟の中堅幹部となった麻生久、赤松克麿をはじめ西尾末広、浅沼稲次郎、共産党の徳田球一、高橋亀吉、田口運蔵、アナキストの中浜鉄、女性運動家の山川菊栄らと、いちいちあげ切れないほどの多数の運動家が執筆者として登場している。

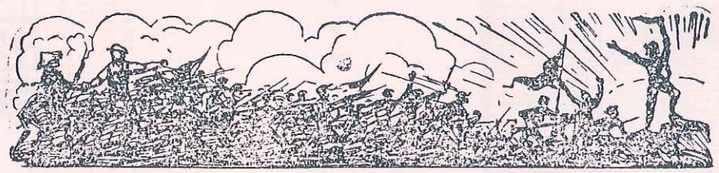
その執筆者たちに対して、『進め』は、諸団体の機関紙誌と違って十分な意見の開陳の場を提供している。すなわち、運動の具体的実情、内実がよくわかり、その点でも資料的価値を高いものにしている。

また執筆者陣の多様性だけでなく、編集者が時事の課題についてのアンケートを集めている。すなわち、創刊直後の社会運動にとって最大の課題であった普通選挙と無産政党の問題をはじめ、その後の、時々の運動課題についてひろくアンケートにより意見を載せている。それと『進め』地方支局設置による地方運動通信の掲載にも努力している。

それらが社会運動史研究にとって必見の資料となっているといえよう。

一九二八（昭和三）年の共産党弾圧の三・一五事件で多くの執筆者を失い、その後は上条愛一らの中間派論客をはじめ合法左派、労働組合主義者らが登場した。

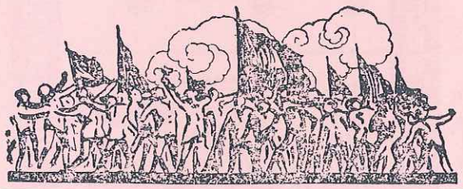
その後『進め』は時流のおもむくままに紙面も変わって行った。また、その変わりゆく様も一つの資料といえよう。



拙著『日本共産主義青年運動史』や東海地方社会運動史（現在進行中）の仕事のために、東大新人会や早大建設者同盟の機関誌類、初期共産党の機関誌類『赤旗』『前衛』『階級戦』『農民運動』、さらには雑誌『解放』『我等』などをさがして、大原社研や京大人文科研をあさり、読んでいたころ、そこで欠号の多い『進め』を発見したのは。

私の書棚のスクラップ・ブックには、それらから抜粋した手書きのノートの切片や、中央労働学院のくもの巣の張った書庫で自分で撮影拡大したマイクロ・フィルムのプリント、のちになると例の「デンリコ」で複写した大量の史料が貼ってある。『進め』はそのなかの三冊におさまっている。史料の収集は、手書きからゼロックスへと隔世の進歩をとげ、『社会運動通信』をふくめて多くの稀少史料が復刻された。ここにいままた『進め』が加わったことは、たい究者が、かつて私どもが東奔西走し、かつ欠号に泣きながら探索した手間をはぶいて研究を進めることができるのだから。

「戦闘雑誌」、のちには「無産階級戦闘雑誌」と銘打った『進め』は、発刊以来ひんぴんと発禁にあっている。一九三〇年前後でも、二九年の七、八、一〇月が発禁、九、一一月休刊、三〇年の二、三、四月が発禁というぐあいであり、五、六月合併号（全国労働組合同盟批判号）では、「維持会員を募る、発禁の嵐の前に協力せよ」と、毎月五〇銭以上の維持費を訴えている。その思想的立場はあの激動期を反映して、幾度か変っているが、当代の理論家・運動家・作家たちを擁してはなばなしい。私もぜひ通して精読したいと思っている。



『進め』で忘れえぬこと

渡部　徹・京都大学名誉教授

『進め』を日本労働運動史研究の上で、資料的価値の高い雑誌として、最も早く利用したのは私であると自負している。一九六九年刊の講座『マルクス主義』12（日本評論社）、第三章「日本のマルクス主義運動論」がそれである（同書、二二八頁以下）。

ついで斎藤勇も、二三年九月の関東大震災後、「一二月に、はやくも大阪で復刊された雑誌『進め』は、共産党中央委員＝北原龍雄を主筆として、党の合法的機関誌としての役割をにない…」（『日本共産主義青年運動史』二三頁）とし、同誌所載論稿を重視、また同誌二四年三～六月号掲載の「進め社支局一覧」から、「支局および支局的役割をはたした個人」が「二九道府県五五ヶ所に及ぶ」（二七頁）として、共産主義青年運動に果たした役割を明らかにした。

中でも忘れがたいことは、『荒畑寒村著作集』2（平凡社、一九七六年刊）の編集・解説の作業の中で、二四年二月号の同誌掲載の、鎌田安之助「普選実施と政党運動」が寒村筆であることを発見したことである。これは、徳田球一が、三・一五事件予審訊問調書第十一回の中で、「既に述べました通り、荒畑勝三は普選大害論者であり、議会行動否定論者であったのであります。然るに『コミンターン』に行く事になって此の誤謬を清算したのであります。其処で彼は『コミンターン』の方針に従い、当時『進め』誌上に自分の過去の説を正し、積極的に普選獲得へ進むべき事を宣伝しました」と陳述していることがヒントとなり、探索の結果、前掲論文末尾で「荒畑寒村君が曾て『前衛』誌上に発表せる政治運動に関する一論文に至っては、明白にサンジカリスト的偏見の残存を曝露したものであった」とあるのが決め手になって寒村筆と判断、寒村自身の確認もえた。

このような重大な史料が『進め』から発掘されたことだけでも、同誌のもつ史料価値がうかがえるであろう。

『進め』創刊号（1923年2月）表紙

戰鬪雜誌

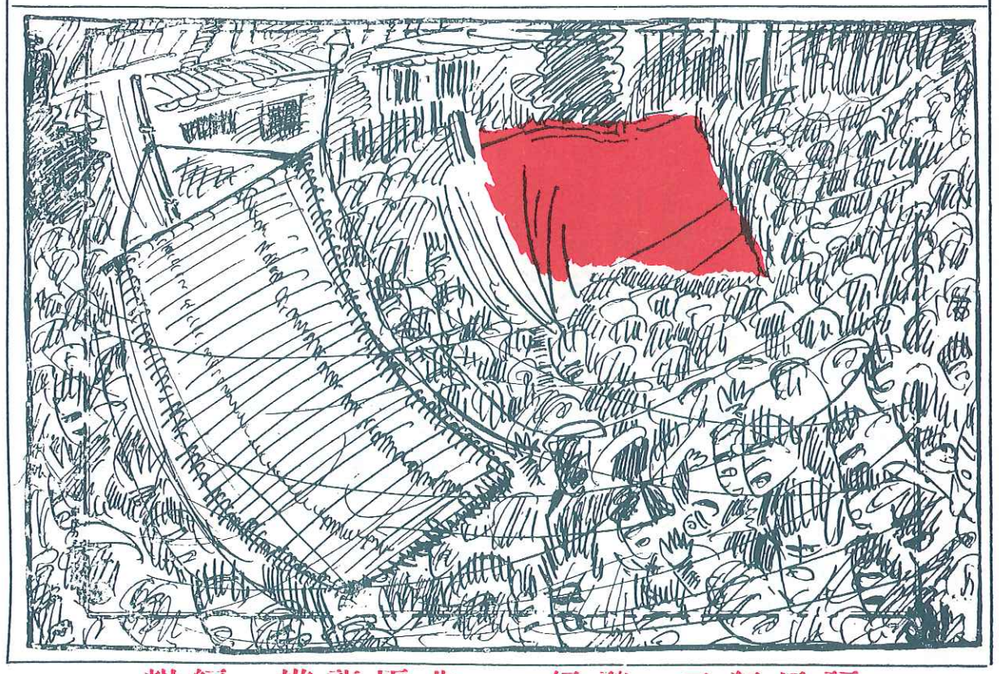
Fighting Magazine
Su Su Me.
No. 1. vol. 1.
Feb. 1923

進め

第一卷第一號　大正十二年二月號　毎月一回一日發行
大正十二年一月三十一日第三種郵便物認可
一部十錢

第一卷第一號内容

吾等の視野（時評）……福田狂二・北原龍雄
ボルシエヴヰズムの日本化…北原龍雄
無産階級と水平社運動……高橋貞樹
白色の妖怪に對抗せよ……同人
片山潜氏の記憶……山川均
癇癪と痛快味……福田狂二
勞働運動と小作運動とは背馳せざるか……岡千代彦
二十餘人
知人・同志・友人……女問諜
東西南北の見舞……
軍隊で暴れた話……福田狂二
進めと守れ……寳奚婦のシベリヤ撤退……堺利彦
エロシエンコ・糸川二一郎・伊藤三郎
共同戰線と民族……金若水
獄中吟……高野松太郎
革命を守る魂……
勞働者と小作人との對話……
社會運動の經驗と思ひ出……荒畑寒村・加藤勘十・水沼辰夫・加藤一夫・京谷周一・吉田只次



福田狂二　發行　北原龍雄　編輯

彦、岡千代彦、荒畑寒村、山川均ら、それと山川の門下生　それらが社会運動史研究にとって必見の資料となってい

『進め』内容見本――縮小しています。

社會主義の社會に就て（一）

猪俣津南雄

一

二

三

四

— 2 —

無産階級法律問題

布施辰治

（一）

（二）

（三）

— 9 —

有閑婦人と女工の生活

岡安愛子

— 26 —

資本家側の健康保險法改廢の主張

丸岡重堯

— 7 —

①第3年第6号／②第4年第6号／③第4年第12号／④第5年第8号より

復刻版 進め

全12巻・別冊1

★復刻版概要

原本
- ①月刊『進め』大正12年2月→昭和6年3月 四六倍判・B5判・菊判
- ②日刊『進め』昭和9年3月29日(101号)→11月29日(300号)新聞紙大

概要 B5・B4判／上製／函入 総4,300頁

解説 田中真人・同志社大学人文科学研究所教授

別冊 解説・総目次・索引（分売価5,000円）

配本 全3回配本 '89・9／'89・12／'90・2

本体価格 全12巻別冊1揃価240,000円

★刊行概要

- 第1巻 大正12年2月～12月 320頁 B5判
- 第2巻 大正13年1月～11月 396頁 B5判
- 第3巻 大正14年1月～12月 408頁 B5判
- 第4巻 大正15年1月～12月 412頁 B5判
- 第5巻 昭和2年1月～5月 324頁 B5判
- 第6巻 昭和2年6月～12月 316頁 B5判
- 第7巻 昭和3年1月～8月 416頁 B5判
- 第8巻 昭和3年9月～12月 336頁 B5判
- 第9巻 昭和4年1月～12月 324頁 B5判
- 第10巻 昭和5年1月～6年3月 252頁 B5判
- 第11巻 昭和9年3月～7月 404頁 B4判
- 第12巻 昭和9年8月～11月 380頁 B4判
- 別冊（解説・総目次・索引）

第1回配本 '89年9月 本体価格 72,000円

第2回配本 '89年12月 本体価格 72,000円

第3回配本 '90年2月 本体価格 96,000円

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

不二出版
東京都文京区向丘一―二―一二
TEL〇三―八一二―四四三三
FAX〇三―八一二―四四六四
振替〈東京〉六―九四〇八四

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。